
ライラックの下に眠る

律花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライラックの下に眠る

【Nコード】

N2177N

【作者名】

律花

【あらすじ】

深いふかい森の奥。今日も、あの子は泣いている。
「大丈夫だよ、リラ。悲しいことなんて、何もない」
その涙が洒れるまで、僕はずっとそばにいる。

やさしい世界

深いふかい森の奥。

今日も、あの子は泣いている。

*

薄暗い森の中、大樹にもたれて空を仰ぐ。

涼やかな風が吹いて、葉末を揺らしてゆく。

その音に耳を傾けていると、はるか遠くから声が聞こえた。胸を締めつけるような、押し殺した泣き声。けれど、方角が分からない。必死に神経を研ぎ澄ませます。

そのとき、僕の指先につぐみが下り立ち、美しい声でささやいた。

『リラが来たみたいだよ。早く行ってあげて』

つぐみがすいっと飛び立ち、ぱたぱたと羽をはばたかせて僕を誘導してくれる。

「ありがとう」

僕は礼を言っ、つぐみの案内にしたがった。

リラはすぐに見つかった。森の中にひっそりとたたずむ湖、そのほとりに座り込んで泣いていた。薄汚れた金色の髪が、降りそそぐやわらかな光を反射している。

僕はリラの隣にひざをつき、小さな体躯を抱き寄せた。そっと背中を撫でながら、さとすように言う。

「大丈夫だよ、リラ。悲しいことなんて、何も無い」

リラは僕の声など聞こえていないかのように、押し殺した声で泣きつづける。細い腕で、精一杯の力で僕の身体にしがみつく。

僕はリラに届くまで、同じ言葉を繰り返して、その背中を撫でつづけた。

ようやくリラが泣きやんだ。ほっとして、抱きしめていた腕をほどき、僕はたずねる。

「今日はどこに行くの？」

リラは目じりに溜まった涙を拭って、声を弾ませた。

「川。たんぼぼがたくさん咲いていて、とてもきれいな。……それから、いつもの場所」

「そっか、楽しみだな」

「うん。早く行こ！」

嬉しそうに笑って、リラが僕の手を取る。僕はその手をぎゅっと握り返した。

リラの言葉どおり、そこはとてもきれいな場所だった。

黄色い絨毯を敷き詰めたみたいに、一面に咲いたたんぼぼが、風が吹きたびいっせいに揺れて、ふわふわと白い綿毛を舞わせる。底がよく見える透明な川は、太陽の光をはね返して輝いている。たぶん、僕たちのひざ下くらいまでの深さだろう。

僕の手を掴んだまま、リラは一目散に川の方へ向かってゆく。そして、ためらいなく飛び込んだ。

ぱしゃんと飛沫が跳ね上がり、粒子がきらめく。冷たい水を浴び、二人とも服がびしょ濡れになった。

リラが声を上げて笑い転げる。

それが嬉しくて、僕も一緒になって笑った。

*

僕とリラは、よく遊んだ。

野原をかけ回ったり、紅葉やどんぐりを拾い集めたり、一緒に大

きな雪だるまを作ったり。

リラが白詰草で花かんむりをつくってくれたこともあった。
雨上がりの虹を、二人で眺めたこともあった。

僕はリラの笑顔が好きだった。

それさえあれば、他に求めるものなんて何もなかった。

*

『今日は大樹の下にいるわ』

カナリア
金糸雀が僕にそう教えてくれた。僕は礼を言って、その場所に向かう。

ざわざわと、大樹の葉が擦れる音。そして腕の中で、リラの泣きじやくる声。

「また、濡らしちゃった……ごめんね」

涙で服が濡れたことを気にして　いつも泣いてばかりいることを気にして、震える声で、リラが申し訳なさそうに謝る。

「そんなこと、気にしなくていいよ」

僕は笑って、ぼんぼんとリラの頭を撫でる。リラはくすぐったそうに身じろぎをして、やっと笑顔を見せてくれた。

「今日はどこに行く？」

「いつもの場所。追いかけてこするの」

「よし。じゃあ、行こう」

立ち上がり、どちらからともなく手を繋いだ。

金糸雀のおしゃべりを楽しみながら、しばらく森をゆくと、視界がひらけた。

抜けるような青空の下。広がる大地。白、薄紫、桃色……あたり一面に咲きほこる、色取りどりのライラック。

僕たちは色んなところに行っただけで、どこに行っただきでも、最後にたどり着く場所は決まってここだった。リラにとってここは、きつと特別な場所なのだろう。

「わたし、逃げる方がいいな」

「じゃあ僕が追いかけるね。十、数えるよ」

「はい！」

リラが楽しそうに声を上げ、それから走り去ってゆく。僕はゆっくりと十秒数えて、リラのことを追いかけた。

僕の方が足は速い。

だけど、たくさんのライラックのせいで視界が悪く、油断するとすぐにリラの姿を見失ってしまう。背の低いライラックの陰に隠れると、小さなリラの姿はなかなか見つけることができない。だから、僕は手を抜いたりしない。お互い真剣勝負だ。

どれくらいそうして遊んでいたろう。二人ともくたくたになっただので、いったん休憩を取ることにした。

真っ白なライラックの下に、僕たちは並んで腰を下ろした。

風が吹いて、花をやさしく揺らしてゆく。甘やかな香りが鼻先をかすめる。

リラは頭上にあるライラックの花を仰ぎ、それから僕に向かって微笑んだ。

「わたしの名前、このお花から取ったんだって。おかあさんが教えてくれたの」

ここに来たとき、リラはいつもそう語る。

その顔はとても幸せそうで、僕は胸がいつぱいになる。

壊れた世界

「ここが好き。悲しいことが、何も無いから」

怒鳴り声が聞こえることもない。痛い思いをすることもない。それが嬉しいとリラは言う。そして、僕に微笑みかける。

僕は声を失くしたみたいに、何も言えなくなってしまふ。

*

いつもの場所。薄紫色の花びらを揺らすライラックの下で、リラがふと歩みを止め、視線を上方に移した。

「わたし、今日はこの色が好き」

「今日は？」

鸚鵡返しする僕に、リラは照れくさそうに笑った。

「えっとね、日によって変わるの。この間はあの色が好きだった」

そう言っつて、近くにある白いライラックを指差す。そっか、と答えて、僕はリラに笑いかける。

「じゃあ、今日はここで休もうか」

「うん！」

リラは大きくうなずいて、弾けるような笑顔を見せてくれた。

薄紫色のライラックの木陰に、いつものように二人並んで腰を下ろした。

風が吹き抜けるたび、あたり一面に香るライラックがはらりと花弁を散らす。さざ波のように、葉の擦れる音がひびく。

他愛のないおしゃべりをしていたリラは、段々言葉少なになり、まもなく口をつぐんでしまった。小さくあくびをして、そっと僕の肩に頭を預けてくる。

「眠いの？」

たずねると、あわてて身体を起こし、こくんとうなずいた。

「気にしないで、眠っていいよ」

「……うん」

リラは眠たそうに目をこすり、再び身体を預けてきた。触れ合っているところから、服越しにじわりと温もりが伝わってくる。金色の髪がさらりと僕の肩口にこぼれ、さわると、そのくすんだ髪はやわらかく指先に絡んだ。

すっかり眠ってしまったらしく、リラは微動だにしなかった。

近頃、リラは眠っている時間が長くなった。

以前は僕とあちこちをかけ回ったり、おしゃべりをしたりしていたのに、最近はこちらに来てすぐ眠りに落ちてしまう。

きつと疲れているのだろう。この世界にいるときだけでも、ゆっくりと休ませてあげたかった。

一緒に遊べなくても、おしゃべりができなくてもいい。

ただ隣にいてくれれば、それだけでいい。

リラが向こうの世界に帰る瞬間まで、僕はあどけない寝顔を見つめていた。

*

ずっと、ここにいればいい。

何度そう思っただろう。

だけど、リラのいるべき場所はここじゃない。

どれほど向こうの世界が辛くても、
どれほどこの世界が安らぎに満ちていても、
リラは必ず帰らなければならぬ。

だから、せめてここでの時間が、ほんのわずかでも救いになるようにと。

そう願わずにはいられなかった。

*

夢を見た。

それは向こうの世界で起こっていることなのだ、僕はこれまでの経験から理解していた。

けれど、今日はいつもと違う。

泣きわめくりラの声が聞こえる。

たとえ何をされても、あのひとの前では絶対に泣けなかったのに。
不安がひしひしと押し寄せて、心臓が早鐘を打ち始める。

視界がぼやけているせいで、何が起こっているのか分からない。

耳を澄ませると、リラの言葉が輪郭を帯びてきた。

おかあさん、やめて、お願い。

悲痛な声でそう訴えている。

けれどあのひとは、リラの言葉に耳を貸すつもりなど、きつと欠片もない。

それまではつきりとしなかった視界が、霧が晴れたみたいに鮮明になる。

そして、僕ははつとする。胸がつかえて、息が出来なくなる。
あのひとの手元に目が釘付けになる。

……ノートだ。

鍵をかけた机の引き出しに、しまっていたノート。

あのひとが、持っているノートを力任せに引き裂く。

リラが悲鳴を上げる。それを取り戻そうと、細い腕を伸ばして必死にあのひとにすがりつく。

突き飛ばされて、リラは机に頭を打ちつけた。そのまま床に倒れこみ、痛みに顔を歪めている。

二つに引き裂いただけでは飽きたらず、あのひとは、今度はペー
ジを一枚一枚破いてゆく。紙片が床に散乱する。

リラは逆らう気力を失ったのか、身動きもせずそれを見つめている。
る。

僕は堪えかねて、叫んだ。

どうか、それだけはやめて。リラの世界を壊さないで

い。ただ、違う世界にいるあのひとに、僕の声なんて届くはずもな

い。やっと満足したらしく、あのひとは勝ち誇ったように笑い、そして去ってゆく。

たったひとり部屋に残されたリラは、しばらく呆然とその場に座り込んでいた。やがて我に返ったように、びりびりに破かれたノー

トを拾い上げる。中を見て、求めているものが一枚も残っていないことを認めたのだろう、すぐ傍らに置いた。

それから、紙片を手でかき集める。繋ぎ合わせる。あれほど細かく破られた紙が、元通りになることは決してない。それでも、がむしやりに手を動かす。何かに憑かれたように、一心に。

突然、その手が止まった。

光を失った青い瞳から、ぼろぼろと涙がこぼれて床に落ちてゆく。

一面のたんぽぽ、草原、森、紅葉、降りしきる雪、そしてライラックの花。

辛くて苦しくて心が壊れそうなとき、小さな一冊のノートの中に、リラは自分だけの世界をつくった。色鉛筆で描かれた、温かくてやさしい世界。

その中に生きる自分を夢想して、心を慰めた。

けれど、その世界は壊れてしまって、もう戻らない。

リラはそれを知ってしまったのだろう。

いまや原型を留めていない、つきはぎだらけのライラックの絵。涙を拭うこともせずに、リラはいつまでもそれを見つめていた。

ライラックの下に眠る

つぐみや金糸雀の姿を見かけなくなった。

美しいさえずりさえも、聞こえなくなった。

空が灰色に澱んでいる。

湖の水が濁っている。

みずみずしかった木々の葉は、ほとんどが枯れ落ちてしまった。

積み重なる数々の異変。

この世界が壊れてゆくのを、僕はなすすべもなく、ただ、見ていた。

*

遠くから、かすかにリラの泣き声が聞こえた。

僕はじつと耳を澄ませ、その方向へひたすら足を進める。枯れ葉に埋もれた森は、裸の枝があちこちに張り出していて、ひどく歩きづらかった。泥が絡んだように足が重くて、何度も立ち止まりそうになった。

僕を案内してくれるつぐみや金糸雀は、もういない。それが、ひどく悲しかった。

ややあつて枯れ木の密集した道が途切れ、視界がひらけた。

たどりついたのはいつもの場所だった。

ライラックが青々とした葉を風に揺らし、色取りどりのきれいな花を咲かせている。澄んだ色をした空が、果てもなく広がっている。

いつもと変わらない、色鮮やかな情景。

そんな見慣れたはずの情景を、いまは心から愛しいと思う。

大丈夫だ。そう自分に言い聞かせる。まだ、すべてが壊れてしまつたわけじゃない。

立ち止まり、ぐるりとあたりを見渡す。

リラはすぐに見つかった。白いライラックの下で、地面に座り込み泣きじゃくっていた。

僕はリラのそばに歩み寄る。

「泣かないで、リラ。大丈夫だよ」

隣に座り、震える身体を抱きしめた。このまま消えてしまわないようにと、強く。

「大丈夫。悲しいことなんて、何も無い」

繰り返し、ささやく。やさしく背中をさする。

このまま終わってほしくない。

けれど、懸命に嗚咽を堪えようとするリラの姿は、あまりに小さくて弱々しかった。

永遠とも思える時間の後。やっと心が静まったのか、リラはゆっくりと顔を上げた。

涙はいまだ涸れていなかった。まばたきをするたび、濡れた目から溢れて頬を伝ってゆく。

それでも、リラはまっすぐに僕を見つめてくる。ライラックの葉が白い頬に斑まだらの影を落としていた。

「たくさん、泣いたね」

僕はリラの頬に触れ、指先でそっと涙を拭いた。笑って、いつもの調子で問いかける。

「今日はどこに行く？」

けれど、リラはなにも答えなかった。うつむいて、ゆるゆるとかぶりを振る。

「ごめんね。わたし……疲れた」

ただひと言、掠れた声を絞り出して呟く。それから倒れ込むようにして、再びその身体を預けてきた。

僕は両の腕でそれを受け止める。

込み上げてくる思いを飲み込んで、応えた。

「いいよ、眠っても。僕はずっとここにいるから」

腕の中で、こくん、とリラが小さくうなづく。

そのとき、白い花びらが一枚、ふわりとリラの肩に舞い落ちた。

僕は反射的に顔を上げ、息を飲んだ。

近くにある薄紫色のライラックが、急速にその花を散らし始めていた。

それを皮切りにしたように、周辺のライラックも風に揺られ、次々と花びらを散らしてゆく。

流れる風にさらわれて、舞い上がって、さまざまな色が入り乱れる。

「いいよか、と僕はさとる。」

じきに、この場所も壊れてしまうだろう。

そしてこの場所が壊れたとき、僕も一緒に消えてしまう。

それなのに

目の前に広がる光景は、ひどく幻想的で、美しかった。

頭上から、白い花びらが舞い落ちてきた。

いつか二人で見た雪のように、それはひらひらと宙を踊り、僕とリラの身体に降り積もる。

だけど、雪と違って、ライラックの花びらが消えることはない。

「リラ」

金色の髪を指で梳きながら、呼びかける。

しかし、もう眠りに落ちてしまったらしく、リラの声が返ってくることはなかった。

僕はすこしだけ腕を緩めて、眠っているリラの顔を見る。

そして、思わず微笑んだ。

返事なんて、なくてもかまわない。

その寝顔はとても穏やかで、満ち足りていて、

そのことが、ただ嬉しかった。

「……きみのことが、大好きだよ」

徐々に視界が歪み始めた。色が消えて、風景がモノクロになる。

葉擦れの音が聞こえなくなり、辺りが静寂に閉ざされる。

もうすぐ、僕はこの世界から消えてしまうだろう。

けれど、リラの笑顔は僕の脳裏に焼きついている。

最期のときまで、僕の身体はリラの体温を、鼓動を、感じていられる。

それだけで、僕は幸せだった。

ライラックの下に眠る（後書き）

こんなお話を書いておいて何ですが、実はわたし、ライラックを見たことがあります。なので、描写は完全に写真とイメージ頼り……ちゃんと伝わる文章になっているのか不安です；
ライラック、一度実際に見てみたいなあ。

それでは。最後までお付き合いくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177n/>

ライラックの下に眠る

2011年9月20日21時10分発行